

陳 情 文 書 表 (2 0 - 1 - その 1)

- 1 受理番号 陳情第2号 令和2年1月27日受理
- 2 件 名 戦前まで周西小学校校庭にあった「忠魂碑」を、平和を願う石造の遺産として永遠に遺すことを求める陳情書
- 3 陳 情 者 住 所 君津市君津台1-3-3
氏 名 坂井 昭

4 趣 旨

平成10年度に母校の周西小学校が創立百周年を迎えるので、それを記念して同校の記念誌を作成するための編集委員長となっていたいただきたいと打診と依頼をされ、平成9年4月に同編集委員長となるということがありました。編集のため多くの方々から昔の懐かしい写真を募集するうち、太平洋戦争が終結するまでの「周西尋常高等小学校」「周西国民学校」と呼ばれた時代に、児童や生徒、教職員が同校校庭の東側にあった「忠魂碑」を前に、愉しそうに写る写真を多数拝見する機会を得ました。

「忠魂碑」のその後の行方を追跡してみると、偶然にも平成9年当時、君津市遺族会第2代会長であった、わたしの父、坂井五郎から「うちが管理している高坂霊園(君津市坂田1585番の山側に隣接する霊園。)に置いてある」と聞いて驚愕し、それが3つに割れた状態で遺っていることを知りました。父の話では「忠魂碑は以前には忠霊塔の立つ場所(現在の君津市中央公園内の東南側の平成13年に改装建設の忠霊塔のあるあたり)に、割れたまま放っておかれていた。」とのことでした。石碑の裏面には「日清・日露の戦争と日中戦争の最初のころに戦没した周西村の戦没者の名が刻んである」と聞きました。父は「割れた状態で放っておいては、戦没者が気の毒でふびんに思え、放置されていたことに我慢ができなかった」といい、平成の初めに高坂霊園を造成する折に石材業者に頼んで移動し、その後、同霊園の駐車場の片隅に積み重ねて置くようになりました。

わたしは平成10年11月に周西小学校創立百周年記念誌『学窓に風光る』(本文351頁)をぶじに発刊し、忠魂碑のことを取り上げましたが、その後に忠魂碑がどうなったかについては書きませんでした。

そして、平成16年12月に君津市遺族会の会報『平和の鐘』第13号で「ある石ぶみのたどる運命」と題して文を書き忠魂碑のことを訴えましたが、何かご意見などをいただくことはありませんでした。

その年の12月末に父は亡くなりました。2年後の平成18年11月5日～9日に、わたしは、父がかつて捕虜収容所に収容されたフィリピンの戦跡地を本市遺族会の方々と慰霊のために訪問しました。それにより所期の目的を達成したと思い、3年後の平成21年5月12日付の手紙で市遺族会の退会届けを提出いたしました。

その後、10年以上の歳月が経過しましたが、わたしはこの件に沈黙を守り続けました。その理由は、その解決策を思うたびに、それを具体化することや発言すること自体がいかにもむずかしいかということ、とくに「〈公平公正な立場〉から〈適切で適正な発言をすること〉のむずかしさ」を何度も痛感させられたからです。

しかしながら、昨令和元年の夏のこと、それより15年前の2004年3月末に米国ワイオミング州シェリダンのある交流家庭からわたしに預けられた、第2次世界大戦中に日本兵が戦地に携えた日章旗の持ち主の遺族を探す問題が解決するということがありました。15年間の探索の末に遺族を探し出し、令和元年8月8日に遺族のお住まいのある滋賀県

の県庁で三日月大造滋賀県知事を仲介者として、ついに遺族に日章旗を返還することができ、京都新聞や朝日新聞滋賀版、NHK大津放送局の報道等を通じて紹介されました。

そして、その9日後の8月17日には、米国ワイオミング州シェリダンへと1人で旅立ち、今は亡き交流家庭のご父母の墓前で15年前に預かった日章旗を日本の遺族に返還できたことを報告しました。その米国滞在中にはワイオミング州知事のマーク・ゴードン氏より46年間のわたしの日米親善の努力の労をねぎらわれ、氏直筆署名の表彰状をいただくというできごともありました。

また、各地の戦没者の遺族や遺族会組織をよく知る機会などもありました。そうした経緯から、わたしも公人か準公人として行動しうることの力を得、今回、忠魂碑の件を君津市議会に陳情し、それを通じて広く本市市民にお考えいただける機会としてとらえました。

わたしはその忠魂碑を、折れて積み重ねられた現在の状態でしか見ていません。それを立体的にすべての面から眺めた場合には、思わず目を背けたくなる人も出るでしょう。けれども、その石碑が周西小学校の校庭(現君津市中野5丁目。イオンタウン君津、「周西小学校跡地の碑」の東側)にかつてあり、戦後まもなくの時期に人為的に破碎されてしまった事実は消せません。それは忘れてはならない1つの歴史です。

しかし、現在の忠魂碑を見て、だれが悪いとして人に責任をなすりつけ、非難するのではいけません。

わたしたち君津市のすばらしい明日の世代を担う子どもたちに対しても、だれに対しても石碑が割れている状態や戦没者の氏名などから目をそらさずに平静に受け止め、正確な歴史を認識する視点をもって説明でき、永遠に戦争の過ちを繰り返さないことを誓うことのできる社会であってほしいと願います。

その方法を原点にたってお考えいただきたく陳情をいたします。

以上、戦前まで周西小学校校庭にあった「忠魂碑」を、平和を願う石造の遺産として永遠に遺すことを求める陳情書の本旨といたします。